

## (4) 学校造園研究会

会 長 松田 文雄 (中村中)  
副会長 渡辺 昌幸 (蕨岡小)  
事務局 小橋 匠 (東山小)

### 1. 研究主題

「よりよい学校環境を目指して」

### 2. 研究過程

実施年月日	研 究 の あ ら ま し	会 場	備 考
R2. 11. 13 (金)	○夏季研修会 「J G A P 認証取得の成果と以後の取組について、学校園芸施設の見学・説明 (講話・見学)」 講師：幡多農業高等学校 西森隼也さん (実習助手)	幡多農業高等学校	12 名参加

### 3. 今年度の取り組み

○夏季研修会 11月13日(金) 幡多農業高等学校

県内5例目(県内農業高校として初)で取得した「J G A P」(ジェイギャップ)。その取得後の様子やこれからの取組について、施設見学を行いながら話を聞いた。

トマトのハウスは、現在は既存の施設を使っているが、2～3年後には新しいハウスに建てかえられる予定で、管理棟において「温度」「水やり」「調光」など全てが管理されるようになる。農業も工業化(スマート農業)に向かっているとのことでした。



農具の保管管理については、種類毎に所定の位置に整理して置かれ、鍬一本一本にもナンバリングが行われ、何かが無くなっても一目でわかるようになっていた。

収穫されたトマトを袋詰めする部屋では、土足ゾーンと上履きゾーンがきちんと区別されると共に、袋詰め中に天井から、異物が混入しないように、ビニールで仕切られ、衛生面に配慮されているのがわかった。

現在、「J G A P」でミニトマトの更新審査を行っているが、この「G A P」の取組を生徒が近隣の農家に広げられるようしている。そのために、「J G A P」の指導員資格を教員も生徒も取得したそうです。

質疑では、主に二つの話になった。一つ目は、「農薬の使用について」で、幡多農では使用する時は散布の使用回数や使用量を守ったり、トマト栽培では、使用制限のないデンブンのものを使ったりしている。二つ目は、「土づくり」についてで、土づくりは育てる植物に応じて配合を変えたり、水はけの善し悪しを配慮した配合を行ったりしている。また収穫後、土を自然に返すために、以前は自然還元が難しいロックウールを使っていたが、現在は、やしがら(自然素材)を使っている。どちらも環境や人にやさしい農業実践をおこなっていることがわかった。



#### 4. 令和2年度四万十市教育研究大会

研修会が講話・見学内容のため、討議記録はなし。

#### 5. 今年度の成果（○）と課題（●）

- J G A P 認証取得後の取組について知ることができた。
- 日々新しい課題解決に向け、農業高校が取り組んでいることがわかった。
- 会員の関心の高かった土づくり、農薬についての知識を豊かにすることができた。
- 今年度は、剪定実習を行うことができなかったが、来年度は学校美化・会員の技量の向上を目指して実施したい。